

12 世紀の隠修制の危機 — 隠修参事会制の構造と権力編成 —

「教会と社会」研究会（2005 年 7 月 9 日）小野 賢一

21 世紀の教会史研究は「教会と社会」という主要課題をめぐって進展してゆくように思われる。本報告では、隠修制の「教会と社会」という問題を検討する。この問題に関しては豊富な研究の蓄積がすでにある。その代表的なものは次の 4 つである。今野國雄氏は (1) *Pauperes Christi* の改革運動（理念）と社会、池上俊一氏は (2) 隠修士の精神＝霊性（理念）と社会、ブリニは (3) 隠修制の経済的な矛盾、即ち理念と現実社会の遊離、杉崎泰一郎氏は (4) 仮想現実としての「荒野」(eremus)、即ち理念と現実社会の遊離、についてそれぞれ解明した。

隠修制の「理念と社会」研究の問題系列 (1) (2) の課題は「隠修制と *vita canonica* (A.Vauchez)」から「*vita canonica* としての隠修制＝隠修制の規範化(normalisation)」と「隠修参事会制の成立」へと展開できよう。隠修制の「理念と現実」研究の問題系列 (3) (4) の課題は「隠修制の経済的成功という矛盾の検証」から「権力編成（政治・法・制度上）の問題としての隠修制の特質解明」へ展開することで隠修制の矛盾の本質がよりいっそう明白になるだろう。

隠修制の「教会と社会」に関する二つの問題系列 (1) (2) / (3) (4) の継承・発展が本報告の課題である。史料として同時期（12 世紀末から 13 世紀初頭）に編纂されたオーレイユ律修参事会の *vita, consuetudines, cartularium* を使用し、プリズムの焦点を権力編成の問題に集中させ、議論を展開していきたい。

次の 3 点が明らかになった。

① *vita* はグランモン会を意識して記された列聖申請書であって、隠修制の危機を乗り切り新体制を強固なものにする手段である。新体制とは隠修聖職者制と俗人隠修制を混在させた②の隠修参事会制である。

② オーレイユ律修参事会の隠修参事会制の構造と権力編成は、初期サン・リュフ方式であり、リモージュ司教管区再編計画の支柱を構成する。再編計画はグレゴリウス改革厳格派の路線を避けて、現実的なシャルトル学派の聖俗協調路線を基盤としていたと推測される。オーレイユの隠修参事会制の構造と権力編成は、「司教座－隠修参事会 (*prieuré*) の階層構造」と「*sacerdotium* の分割・委託」に基づく「階層制の効率的な作動形式」であった。

③ オーレイユ律修参事会の知のコーパスのエディション部分（註 1）と権力編成の相関関係は②を裏書きする。13 世紀にオーレイユは *ordo canonicus* としての自覚を持ち始め、それゆえ知のコーパスのエディション部分（註 2）はきわめて *ordo* という権力編成に適合するものになったのだろう。

今後の課題としては、(a) *prieuré-cure* の構造の解明及び (b) 司教座直轄のサン・レオナル律修参事会とオーレイユの事例の比較を考えている。